

令和七年報恩講法話
浄土真宗御御旧蹟巡り

正信寺 石川英和

令和七年十一月二十三日 正信寺 報恩講 法話

浄土真宗御旧蹟巡り

石川英和

【はじめに】

本日もご多忙のところ、報恩講にお参りいただきましてありがとうございます。

2024年の11月に三夜連続でブラタモリが復活しました。今年の1月3日にも再放送がありました。タイトルは東海道五十七次の旅でした。私は東海道五十三次を日本橋から京都の三条大橋まで、親鸞聖人が京都にお帰りになった六十歳のときに歩きましたので、この放送がとても気になりました。

放送に影響を受けて、2024年の年末に3日かけて、実際に五十七次を歩きました。その際に、浄土真宗の御旧蹟がいくつかありましたので、東海道五十三次を歩いたときの御旧蹟を含めてお話しさせていただきます。

【大阪城】

五十七次の起点は、高麗橋という橋で、大阪城の近くにあります。ここには、里程原標の石碑があります。

大阪城は、豊臣秀吉が築城し、その後、大坂冬の陣、夏の陣を経て落城しました。そして、徳川家康の時代に天守閣が再築されました。ところが、徳川家康が再築した大阪城は明治維新の動乱で焼失してしまい、私たちが見ている大阪城の石垣や堀、大手門・多聞櫓（たもんやぐら）・千貫櫓（せんがんやぐら）などといった建造物は戦後になってから江戸時

代の図面を基に建物を復元したものです。

近年、秀吉が築城した石垣が発掘されているようです。

実は、大阪城は元を糺（ただ）すと、本願寺第八世法主蓮如上人が隠居先として選ばれたところで、大坂御坊と呼ばれていました。当時の本願寺は京都山科を本拠としていましたが、一向一揆を背景として本願寺の影響力が強くなると、その武力を恐れた細川晴元は日蓮宗徒の法華一揆らと結託し、天文元年（1532年）8月に山科本願寺の戦い、または、天文の錯乱と言われる合戦で、山科本願寺を焼き討ちしました。これにより山科は廢墟となり、本願寺は本拠を新たに定めなければならなくなりました。十世法主証如上人は、京都に近く交通の便の良い大坂御坊を本拠とし、すでに礎石があつて守りやすい石山を防戦の要としました。こうして、石山本願寺は本願寺の本拠として発展したのです。

戦乱を経て、今では石山本願寺の痕跡を見つけることは、ほとんどできない状態ですが、唯一、大阪城梅林の南側に、蓮如上人袈裟かけの松という木が残っています。徳川幕府が再築城した場所に生えていることから、この木も後から植えなおされたものだと思われます。松のそばに、南無阿弥陀仏という石柱が建てられています。

【光善寺】

大阪淀屋橋から京都の三条駅を結ぶ京阪電鉄本線に、光善寺という駅があります。五十七次の枚方宿に近い場所にあります。

五十年ほど前、前住職は、報知新聞社に勤務しておりました。報知新聞は、明治五年に発刊され、当初は郵便報知という名前で、東京五大新聞の一角を占める日刊紙でした。当時は、スポーツ新聞ではなく、新聞写真をいち早く取り入れ、箱根駅伝を創設するなど新聞の歴史に大きな足跡を残しています。ただ、戦時下に、読売新聞と合併され、戦後になっ

てスポーツ紙になりました。前任職は、東京ローカルで巨人最頂（ひいき）の報知新聞を阪神タイガースの本拠地で販売するため、大阪に単身赴任していたと聞いております。そのときに住んでいたアパートの最寄り駅が、光善寺駅でした。

その光善寺ですが、出口御坊とも言われています。出口御坊があるなら、入口御坊もあるのかと調べてみたら、出口という土地に建てられた御坊なので出口御坊という事でした。開基は蓮如上人で、初代住職は蓮如上人の長男の順如上人です。時系列でみると、現在は大阪城になっている石山本願寺に蓮如上人がお入りになる前、光善寺に留まっていたという流れになります。

光善寺のホームページによると、光善寺で『御文』を十六通書かれたとのこと。東本願寺学院真宗史教授の藤井哲雄先生に聞いたところ、葬儀で良く読む「白骨の御文」は光善寺で書かれたものだそうです。また、本日も拝読した『御俗姓（ごぞくしょう）の御文』は、出口の報恩講で最初に読まれたとのこと。

光善寺から二百メートル離れたところに、蓮如上人腰掛の石という場所があり、この石に座って出口の人たちに仏法を説いたと言われています。出口の人々は、この「腰掛け石」のご遺跡の場所を、「蓮如さん」と呼んで親しんでいます。

蓮如上人が『御文』の第四条の四に「九間在家」（くけんざいけ）という言葉を記されたように、出口はわずか九戸しかない小さい村落でした。出口ではこの「腰掛け石」の形にちなんで「出口だんご」が作られ、この地の名物となっていました。昔はこの門徒の家庭でも「出口だんご」を作りましたが、今はそれもなくなったそうです。

このように、光善寺は浄土真宗の歴史としては重要な場所ですが、残念ながら訪れる人も少なく、寂れた場所になっていました。

枚方宿は、江戸時代に淀川の水運で商業の街として栄えましたが、浄土真宗の寺内町としても繁栄しました。

戦国時代の枚方に順興寺（じゅんこうじ）が建立されます。永禄二年（1559年）に蓮如上人の二十七子で十三男の実従（じつじゅう）が住職となり、本願寺宗主の一族が住職をする一家衆（いっけしゅう）寺院として栄えます。実従は『私心記（ししんき）』という日記を残しており、枚方に住む人々の様子を書き残しています。油屋、塩屋、味噌屋等の屋号を持った商人など多くの人々が住んでいたことがわかります。信長との戦いで本願寺勢力が低下すると、順興寺は廃されました。江戸時代になると、本願寺は東西に分派して、東本願寺は、枚方に再興した寺院に願生坊（がんしょうぼう）の名を与え、また、西本願寺も浄念寺を本山直轄の寺院として特別な扱いをしました。地域の人々は願生坊を東御坊、浄念寺を西御坊と呼んでいたようです。

【法界寺と誕生院】

最寄り駅がJR奈良線と京阪宇治線の六地藏駅となる、伏見宿から東に6キロメートルくらいにある場所は、木幡（こばた）と呼ばれ、そこには、平安時代には浄妙寺という、本堂が法華堂で、三昧堂や多宝塔や鐘楼を備える壮大なお寺があったと言います。この浄妙寺は藤原道長が建立したと伝えられています。鎌倉時代に失火し、再建されないまま、現在は小学校になっています。

その奥の京都市伏見区の住宅地に法界寺（ほうかいじ）があります。ひのやくし法界寺と呼ばれ、宗派は、真言宗醍醐派です。

法界寺のホームページによると、藤原家宗（いえむね）が慈覚大師円仁（じかくだいしえんにん）より、伝教大師最澄（さいちよう）自らが彫

った薬師如来の小像を譲り受けてお祀りし、その後永承6年（1051年）に日野資業（ひのすけなり）が薬師如来像を造ってその小像を胎内におさめ、薬師堂を建立したことがこの寺のはじまりだそうです。当時は観音堂、五大堂など多くの堂塔が立ち並んでいましたが、承久の乱などで罹災し、今では本堂の薬師堂と阿弥陀堂を残すのみとなったようです。

親鸞聖人は、藤原氏の北家にあたる日野家の出身で、法界寺は今でも日野家の菩提寺になります。

本日拝読した『御俗姓御文』の冒頭に、「夫、祖師聖人の俗姓をいえば、藤氏として後長岡の丞相「内膳公の」末孫、皇太后宮の大進有範の子なり。」とあります。有範とは、日野有範のことです。

法界寺の阿弥陀如来像は、藤原氏が隆盛を極めた平安時代に浄土思想や末法思想が流行するなかで造られ、その優い顔立ちが特長です。この阿弥陀如来を中心として、四天柱や天井には壁画が描かれています。阿弥陀堂創建当初は、極彩色で堂内全体にも供養菩薩が描かれ、堂内全体で極楽浄土を表現していたそうです。時代を超えた現在でも、四天柱が取り囲む内陣は当初のまま残っており、当時の貴族が求めた極楽浄土の世界や、中国文化を吸収して日本流にアレンジした国風文化の一端を感じることができます。また、浄土真宗を開かれた親鸞聖人が御幼少のころに初めてご縁を結ばれた仏様とも伝えられ、平安時代の姿をそのまま今に遺す阿弥陀如来と阿弥陀堂は、ともに国宝に指定されています。

この旅行は、東海道五十七次を歩くことが目的でしたが、完歩した感動より、この阿弥陀仏の荘厳さが一番に残っております。檜皮葺（ひわだぶき）の本堂と阿弥陀堂がかなり傷んでおり、国宝でありながら、

なかなか修繕に手が回らないとご住職がこぼしていました。

法界寺の東側に隣接して、日野誕生院という寺院があります。隣接した誕生院幼稚園の中に塀で囲まれた場所があります。その塀の中に、親鸞聖人が産湯を使った井戸と、臍の緒を埋めた胞衣塚（えなづか）があります。これらは、本来は法界寺にあったのですが、西本願寺十九世本如上人が、親鸞聖人の誕生を顕彰したことから始まり、二十世門主の広如上人の時に、親鸞聖人の父の名を冠した有範（ありのり）堂を建立しました。現在は西本願寺から派遣された職員が管理する仏教施設になっています。井戸と胞衣塚を拝観するには、この職員の方にお問い合わせ、誕生幼稚園の敷地を横切って、鍵を開けてもらう必要があります。

誕生院は、六地藏駅からは歩いて30分くらいの場所にあります。日野誕生院前のバス停は廃止され、交通の便が悪い場所でした。

余談ですが、六地藏駅近くに、京都アニメーションの第一スタジオ跡があります。令和元年、放火により才能のあるアニメーターが70名死傷する事件でした。亡くなった方は36名で、火災では戦後最多の犠牲者でした。菩提を弔いたいとの気持ちで、5年を経過した現地に行ってみると、塀に囲まれていましたが、いまだに更地になっていました。半面、こんな狭いところに70名の人々が働いていたのかと思うと、労働安全衛生面で問題があり、逃げ遅れたのかもしれないと感じてしまいました。

【山科】

山科本願寺は、先ほど述べた通り、山科本願寺の戦いで焼失します。当時の本願寺の遺跡の発掘が進んでいます。泉涌寺や東福寺にあるよう

な本格的な石の蒸風呂の跡地が発掘で見つかったときは、新聞にも掲載されました。石風呂は地面から約1メートル掘り下げた半地下構造で、南北6メートル、東西3メートル以上の規模で、内部を石組みで南北2室に仕切り、南側は粘土と石の天井で覆っていたとみられます。この南側の部屋で火をたき、その後水をまいて、蒸気で体を温める仕組みで、北側の部屋では、入浴後に汗を流すなどしていたとみられます。また、石風呂の北には直径3メートルの井戸、東にはかまど跡もあり、汗を流す湯を沸かしていたと考えられています。市の埋蔵文化財研究所によると、遺構は山科本願寺の御影（ごえい）堂や阿弥陀堂の推定地に近接しているそうです。宗主（門主）一族のための石風呂だったとみられるとされています。

お寺の敷地の端には、堀と土塁を築いて、寺内町を形成していました。

山科本願寺の跡地には本願寺派別院（山科別院）と真宗大谷派別院（長福寺）が建っており、南殿跡（なんでんあと）が音羽の光照寺に、土塁跡が山科中央公園に残っています。今は、住宅街の中にそれぞれのお寺があるように見えますが、建立当時は現在の東本願寺や西本願寺より広大な敷地だったことがわかります。

浄土真宗本願寺派舞樂寺（ぶがくじ）のことを地元では「西別院」「西御坊」などと呼んでいます。正式には「浄土真宗本願寺派本願寺山科別院」と言います。天文元年（1532年）に、山科本願寺が焼失した後、200年後の享保17年（1732年）に、第十五世住如上人が京都の北山別院の旧堂をこの地に移築し、聖水山舞樂寺としました。さらに本願寺派第十七世法如上人の時代となって、安永元年（1772年）3月に現在の本堂が建立され、続いて天明元年（1781年）の蓮如上人三百回忌に当たって、鐘楼・太鼓楼、接待所等を増築され、現在のお寺の原型が整備されました。また、中宗堂に安置される蓮如上人像は、上人

自作の像として永く本願寺に伝えられています。

真宗大谷派別院の長福寺は、享保17年（1732年）に、東本願寺十七世真如上人が当時東本願寺の境内にあった長福寺を現在の場所に移築し創建したと言われています。本尊は阿弥陀如来立像で、本堂のそばには、蓮如上人の像が建立されています。

真宗大谷派別院の長福寺の東側入口には「東御坊」と書かれた大きな石碑があり、その前からまっすぐ東へ道が続き、「御坊道」と呼ばれ、南殿の光照寺を経て、東海道五十七次や奈良街道、牛尾山まで続いています。江戸時代には、現在の渋谷街道がなかったため、四ノ宮から音羽を経て、この道を通り山科別院を参拝して、渋谷越えをして京に入る人も多かったようです。このお寺の正式名称は「東本願寺山科別院長福寺」と言いますが、地元では「東別院」「東御坊」などと呼ばれています。真宗大谷派に属し、東本願寺の山科別院です。毎年3月24・25日に蓮如上人御正當法要と、9月24・25日に親鸞聖人報恩講が執り行われます。

東西両別院の中間に、蓮如上人立像跡がありました。昭和9年（1934年）に建立されたこの立像も戦時中の昭和19年（1944年）に「供出」のためになくなってしまい、今は台座のみが露呈しています。ここには、石の台座を含め、高さが10メートルにもなる大きな像が建てられていたといえます。

この像は、東御坊・西御坊と御廟所の関係でこの地点に設けられました。江戸時代の軍学者の由比正雪の子孫（卯三郎氏）が建立したといわれ、彫刻家の黒岩淡哉（くろいわたんさい）作、吉崎御坊の蓮如上人像を制作した高村光雲が顧問でした。いまは土台の石塔北裏に刻銘されたプレートがわずかに往時を偲ばせています。

像が供出された当時、地元の人たちは「蓮如さんも戦争に行ってしまうはった」とたいへん残念がったと言います。

山階（やましな）小学校の北側に、蓮如上人の御廟所があり、門と築地に囲まれた木立の中にひっそりとたたずんでいます。蓮如上人は本願寺八世として各地で活発な布教活動を行い、衰微していた本願寺を再興し、日本で最大の教団発展への基礎を築いたあと、明応8年（1499年）3月25日、山科で亡くなりました。亡くなった地は、西野の西宗寺であつたという説と、音羽の光照寺であつたという説がありますが、いずれにせよ山科本願寺の中で亡くなったことは間違いありません。翌3月26日、蓮如上人の遺体は火葬にされ、御廟所中央の塚に葬られたと言います。その後、江戸時代中期にはこの御廟所を挟んで東本願寺と西本願寺の山科別院が建立されました。

廟所は塀に囲まれ、埋葬されたところに近づくことはできません。

【近松別院】

近松（ちかまつ）別院は、東海道五十三次と東海道五十七次が分岐する山科の追分から琵琶湖方面に向かった大津市中心部にある本願寺派の別院で、本願寺の歴史の中でも重要な役割を果たした寺院の一つです。

寛正6年（1465年）延暦寺衆徒らによって京都東山大谷にあった本願寺が寛正（かんしょう）の法難で破却されると蓮如上人らは琵琶湖の南の現在の滋賀県に避難します。当時延暦寺と対立していた園城寺（おんじょうじ）の五別所（ごべつしよ）寺院の近松寺（こんしょうじ）の寺領を分与され、顕証寺（けんしょうじ）を建立し、真影である親鸞聖人の木像を安置し、事実上の本山となります。この法難の後、蓮如上人は越前加賀国境の吉崎で布教を始めます。

ところが近松別院は、第二次世界大戦が始まると、陸軍病院を作るため解体されてしまいます。現在残っている近松別院は、昭和56年（1981年）に浄土真宗の滋賀県内の寺院、僧侶、門徒らの懇念により再建復興されたものです。

ちなみに園城寺は、三井寺（みいでら）とも言われ、こちらの名称の方が有名です。天皇三代の産湯を使った井戸があることから「御井（みい）」の寺が転じて三井寺というのですが、こちらは通称で、園城寺が正式名称のようです。このお寺は、昨年大河ドラマ「光る君へ」では、岸谷五朗さん演じる、紫式部の父である藤原為時（ためとき）が出家した寺としても有名です。

近松別院の境内に樺の大木が植えられており、これは、大塚の樺といわれています。蓮如上人が吉崎に向かう前に、三井寺の関係者により壮行会が開かれました。そのなかに当時の本願寺の隆盛を快く思わない者がいて、蓮如上人を毒殺するために、調理人を刺客として送りこみました。ところが、蓮如上人の弟子が飼っていた犬が座敷に上がり込み、毒が盛られた料理を食べて死んでしまうのです。身をもって蓮如上人を守った犬を不憫に思い、死骸は手厚く葬られ、そこに樺を植えたと伝えられています。

【おわりに】

歩いて旅をするのは、タイパ、いわゆるタイムパフォーマンスが悪いのですが、旅行会社のパックツアーで行くよりも、好きな場所を巡ることができます。無理をして旅行をする気はないのですが、つつい足延ばすので、足にマメができたり、筋肉痛になったりします。それでも、あまり楽に旅するより、記憶に残る気がします。

また、現地に赴いて歴史に関するものを見聞して、時代背景を含めて

調べると、味わいが深くなります。

本日は、浄土真宗に係のある御旧蹟を廻ったお話をさせていただき
ました。二十四輩と称する聖人の高弟二十四名が開いたとされる寺院を
巡る旅など、古くから浄土真宗の御旧蹟を訪ねることが行われてきまし
た。皆様も、ご健康に配慮しながら、先達が他力本願の信仰を伝え、その
教えを感じることが出来る御旧蹟を巡られてはいかがでしょうか。気の
せいかもしれませんが、浄土真宗が身近になった気がいたします。

ご清聴ありがとうございました。

